

## まえがき

檜田美雄 (HCB00537@nifty.ne.jp)

この報告書は、障害者スポーツにおける社会秩序の相互行為分析をテーマとして行った1999年度徳島大学総合科学部開講科目「社会調査実習」（国際社会文化研究コース・現代国際社会分野の義務的履修科目）の報告書『障害者スポーツの相互行為分析』である。

調査に協力していただいた、X県の盲人卓球グループ、X県車椅子バスケットボールクラブ、X県ろう者バレーボールサークル、X県身体障害者水泳サークルの選手およびコーチ・監督の方々に感謝したい。また、歴史的な資料の複写許可を含めて、情報入手に関する便宜供与をして下さった日本身体障害者スポーツ協会、日本身体障害者水泳連盟、徳島県ノーマライゼーション協会の関係各機関のスタッフにも謝意を表したい。さらに、1999年8月の二度にわたる徳島合宿において障害者スポーツに関する様々な分析上の指針を提示してくれた岡田光弘（筑波大学体育科学研究科）、金澤貴之（筑波大学心身障害学系）、中野聡子（筑波大学心身障害学研究科）の三氏にもお礼の言葉を申し上げたい。とりわけ、中野聡子氏からの指摘（ろう者バレーボールにおいて、聴者とのコミュニケーションがスムーズにいつているように見えるのは、ろう者が聴者に配慮しているからであって、その部分を考えずに日本手話の必要性は低い、と結論づけてはいけない等）は、実習の後半の方向性を決める指摘であった。今回の報告書に掲載した論文が、中野氏からの批判に最終的に答え得ているかどうかについては、十分な自信はないが、答えるべく努力は行った。11月にはマッキーブニーの論文を全員で精読し、「epidemic（固有）な文化」の可能性について、考察を深めた<sup>\*1</sup>。また、ろう者バレーボール班のメンバー（プラス希望者）は、清原健司・嘉美両氏の協力の下、初級レベルではあるが「手話の会」を作り、時間外に手話学習を行った。できる限りのことは行った、と言えるのではないだろうか。

以下、各論文の簡単な紹介をもって『まえがき』とする。

第一論文「ルールの運用からみる盲人卓球」は、盲人卓球がそれ自身として固有のゲーム性（おもしろさ）を持っているかどうか、持っているとするのならば、どのような形でそれを持っているのか、ということを読み明かそうとした論文である。結論としては、盲人卓球は、通常の卓球と同じ台を使いながらも、通常の卓球とは違った戦術・戦略に彩られており、「別のゲーム」である、と言えるということ、それから、その固有性は、「障害者スポーツ」の枠から「盲人卓球」を解放する可能性を導くものであること、この二点

---

\*1 このテーマの重要性に鑑み、檜田・金澤・岡田の3名は、以下のようなタイトルで討議集会を開催するよう『筑波社会学会』事務局に申し入れている。申し入れが採用された場合には、2000年4月22日に筑波大学で行われる「筑波社会学会定例研究会」の一部として、金澤と檜田を発題者、上農正剛氏（九州保健福祉大学）をコメンテーター、岡田を司会者としたミニシンポジウムが開かれることになるであろう。関心のある向きは3月以降、檜田の方で情報提供が可能なので、問い合わせを欲しい。

シンポジウム名：ろう文化と社会学 ― 聴者によるろう文化理解は果たして可能か？ ―

が主張されている。

第二論文「車椅子バスケットボールとはどのようなスポーツか？」も、第一論文同様、障害者スポーツとしての車椅子バスケットボールが、それがベースとしているとされる通常のバスケットボールとどのように同じで、どのように違っているのか、という点に焦点を当てて書かれている。結論としては、「同じ」と見える部分もその成り立ちを詳細に見ていけば、「車椅子」であることに基づいており、逆に「違う」と見える部分もその成り立ちを詳細に見ていけば、「バスケット」であることに基づいている、ということが発見された。本質主義的分析では見落とされてしまう「構成の入れ子構造」の発見は、エスノメソドロジ的研究として評価できるのではないだろうか。

第三論文「ろう者バレーボールにおけるカスケーディングとソーシャル・リフレクション」は、前の2つの論文とは異なり、マッキープニーの先行研究に深く依存した研究となっている。しかし、結論としては、ただ単にマッキープニーがフィンランドのろうコミュニティで発見したコミュニケーションスタイル（視覚のみに依存して情報が伝達される様式としての「カスケーディング」と「ソーシャル・リフレクション」）が、日本でも存在する、ということだけではなく、そのマッキープニーの発見の意味づけにまで踏み込んだ考察を行っている。この部分は短くはまとめがたいが、簡単にいえば、エスノメソドロジ研究としての「ろう文化研究」の方向としては、相互作用の独自性（文化？）を、そこで使われている手段を物象化した形で、技術主義的に要素分解的に把握・紹介する方向ではなく、それを「相互反映性」の重要性に則りながら「期待・予期の構造」として把握・紹介する方向の方が、望ましいという主張を行っているのだと言えよう。データ中に含まれているかもしれない日本手話を見落としている危険性は重々承知している。が、その上で、理論的にいい得るぎりぎりの主張として彼らの主張は容認できるのではないかと思っている。

付録の第二章に掲載している、阿部智恵子のインタビュー記録「障害者スポーツと人生」は、上記の三研究とはべつに、阿部が樫田や岡田と行った「障害者水泳」に関する共同研究の成果である。主要部はインタビューの記録であるが、阿部のコメントにも見るべきものがあると言えよう。たとえば、障害者にとっての生き甲斐としてのスポーツの価値については、石田氏や松木氏へのインタビュー記録（および、それらについての分析）が参考になるであろうし、障害者というカテゴリーに属しながらも、「障害者の指導者」というサブカテゴリーを自分に当てはめることで自尊感情を満足させる「様式」については、岡本氏のインタビュー記録が有用である。この研究は、一種のセルフヘルプ・グループとして「障害者スポーツ」を捉える研究として今後も続けていくべきであろう。

まだまだ書きたいことは多いが、報告書の価値は個別の研究対象に関する分析の切れ味で判断されるべきであろう。私の解説はここまでとしたい。

さいごに、このたった6単位の調査に、当該期間の大学生活の何割もの労力をつぎ込んでくれた学生諸君の努力を「ほとんど奇跡のようだ」と評価していることを今年も記して、前書きを終わりたい。

※なお、本研究は、平成11年度文部省科学研究費・奨励研究A（研究代表者：樫田美雄、研究課題名「障害者スポーツの可能性」、課題番号11710103）の一環である。また、研究の成果は2月15日午後1時から徳島大学総合科学部ゼミ17室で行われる発表会において、ビデオクリップ付きで発表される予定になっている。